
東方漢神録

將軍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方漢神録

【Nコード】

N2125W

【作者名】

將軍

【あらすじ】

自動ドアをくぐった先は緑豊かな大自然！？ 字を操る程度の能力！？

頼りない字面の能力を頼りに、漢字大好き少年が、必死こいて生きていきいくお話。

一文
文字目 大概神様（笑）とか出てくんだけどなあ（前書き）

駄文、ハーレム、チートなどに嫌悪感を感じた方は、ブラウザの戻るを選択してください。

一文字目 大概神様（笑）とか出てくんだけどなあ

「はあゝ、漢検終了」

見直したけど、ありゃー大丈夫だ。

確実に合格できる。

結果が待ちどおしいなゝ、とか考えながら自動ドアを潜る。
そこは森だった。

「ハア！！ 此処どこだよ！！ 自動ドアはどこいった!？」

叫ぶ、が自動ドアは出て来ない。

いや、これは夢だ。夢。夢以外の何ものでもねえよ。

だが、服装は……、まさか、起きた事自体が夢っていう盛大な夢！！

「普段ならこんなこと考えてたら、目覚めるんだけどなあ」

夢の癖に腹まで減ってきやがった。

たく、生意気な夢だなゝ。

取り敢えず、近くにあった湖から水を飲む。

「ウメエ」

普通にそう思った。

水が美味いと感じたのは始めてだが、美味かった。

「ま、水が美味くても、腹が満たされる訳じゃねえんだよなゝ、これまた」

はあ、今日だけで何回溜め息したんだろ。
まあ、いいや。寝よう。そう言えば、夢の中で寝たらどうなんだろう？

*

「寝むれん」

一回は寝たのに、空腹で起きた。生意気な夢め。夢の癖に生意気だぞ！！

「うし！！ 悟りとか開いたら、目も覚めるだろ」

瞑想すること数十秒。飽きた。けど、脳内に変なのが浮かび上がってきた。
なにになに？

「字を操る程度の能力？ ハア」

何それ？ 食べれるの？
態々、程度とかついてるし。

どおでいいやー。
なんか、段々投げやりになってきた。
取り敢えず、なんか食おう。

*

「なんだよアレ」

恐竜が居た。でっかいやつ。
いやいや、あれは食えんだろ、流石に。

あ、目合った。
走ってきた。

「ヤバイヤバイヤバイヤバイ」

これもう夢じゃねえだろ！！
怖すぎるわ！！

「おい、大丈夫か！？」
「助けてくれええええ！！」

全力で叫び返す。

すると、相手は四連ミサイルランチャーを構え……、

「四連ミサイル！？」

「伏せろ」

「うわああああ」

全弾命中。

俺は爆風でふつとばされた。

＊

「こごごごだ。」

「おい、目が覚めたぞ！！ 気分はどうだ？」

「……最悪だ」

「そうかいそうかい」

満面の笑みで笑ってやがる。

ま、生きてるし、どこも痛くねえからいいけど。

「おりゃあ、じふじふ竜導りゆうどう往壓ゆきあつ。あんちゃんは何てんだい？」

「俺は、さきもり防人将真かづまだ。助けてくれてありがとう」

「なあに気にすんな」

笑い合いながら、差し出されたてを握った。

＊

「今日は泊まって行きなはれ」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

「人間素直が一番じゃ」

これからどうしよう。ていつか何時の時代？ どうやってここに来た？

疑問しかねえわ。

取り敢えず、出来る事をやろう。

聞きたい事は明日に聞こう。

考えるのをやめて瞳を閉じた。

二文字目 アンタは将来、必ず良い詐欺師になれる

次の日。

起きたら夢でした、みたいな事は無かった。

「おい、起きろ!!」

「どうしたんですか、雪壓さん？」

「特別にお前さんにも聞かしてやら」
「？」

*

「おゝい、お前ら集まれ」

「あ!! 往さんの話だ!!」

各々、様々な事を言いながら集まってくる。
子供から大人までよりどりみどりで。
往壓さんの手にはマイク。いつの時代なんだ？

「よし、テメエらちびんじゃねえぞ!!」

「」「掛かってきやがれ!!」「」

「今日は雪女の話だ」

*

往壓さんの話は怪談話だった。

しかも滅茶苦茶怖え。

途中から寒くなるのは、雪女の所為。なんて自分でもビックリな脳の反応が起きた。

なんか怪しい術でも使ってそうだ。

「往壓さん、なんであんたの話はあんなに怖えんだい？」

冗談半分で聞いてみたら、普通に答えが返ってきた。

「実は俺、能力を持ってるんだ」

「能力？」

「そうだ。認識を操る程度の能力ってな、無いものがあるって思わせたり出来んだ。便利だろ？」

「反則じゃあないですかい？」

「騙される方が悪い」

将来有望な詐欺師だ。

昨日、瞑想中にでてきた、字を操るなんとかって何が出来んだ？字面からじゃ役にたちそうに無い。

「往壓さん、雪女って見た事あるんですかい？」

「な〜に言ってるんだい。全部俺の考えた話だよ。ハッハッハ！！ビビったか？」

「全然」

「そこは素直に答えるところだろ。それはそうとお前さん」
「何だい？」

急に顔変えて訊いてきやがった。
一体どうしたってんだい。

「これから帰んのかい？」

「……」

どうしようか。

そうだ記憶喪失でいこう。

「実は俺記憶「嘘だな」……」

記憶の時点で看破された。流石は将来有望な詐欺師。

「お前さん、今、失礼な事考えなかったかい？」

「いやいや、心の中でアンタを誉めてたところさ」

悪い意味で。

「ま、理由は訊ねえでやらあ。好きなだけここに居て、勝手に消える。家は自由に使っていいぞ」

「本当にいいんかい？」

「持ち主がいいって言うてんだ、誰も文句は言わんだろ」

「ありがとな」

「どういたしまして」

本当にいいやつだな。

「もっと褒めろ、もっと褒めろ」

「心を読まれた！？ 少し訊きてえ事があんだが」

「何でも訊きんしゃい」

「さっきのマイクはどこで手に入れたんだ」

本当にいつの時代なんだ、ここは？ 恐竜が居たと思えば、それを倒したのがミサイル。どうなってんだい。

「あの山を越えた所に一番科学の発達した町があんだ。さっきのマイクやミサイルは、そこからのお下がりさ」

「今、何年だい？」

「確か、地球ができて二百年だったかな」

過去がこんなに発達してたなんて……、二十三年目の真実だ。

じゃあ、何で資料が残ってねえんだ？

少し考えたが、結論もでねえし、解った所で何にもならんし考えるのをやめた。

その瞬間悲鳴が聞こえた。

「往壓さん、これは何だい？」

「昨日の仲間さ。お前さんは避難してろ、オリヤ昨日の武器を取ってくる！！」

そう言う物凄い速さで去って行った。

俺も昨日みたいな目に会うのはごめんだ。さっさと避難しよう。

そうして踵を返した数分後。

俺は子供を抱えて逃げていた。

クソ、余裕ぶっこいて泣く子供をあやした結果これかよ、絶対に神様いねえわ、コレ。

「おじさん！！」

「舌嚙むぞ！！」

後、俺はお兄さんだ。

「そつち行き止まり」

「さっさと言えええええ!!」

クソ、なんか無いのかい!?

一か八か、あの頼り無い字面を試してみるか。
ちようとゴミもそこにある。

「頼むから俺の思った通りになつてくれよ」

さつき存在を否定した神様に祈りながら、ゴミに手をかざす。
よし、なんかきた!!

案の定『芥』と言う字が出てきた。

それを突進してきた奴にそのまま突き出した。
ドンッ!!

おもいつきりぶつかったが俺たちは吹っ飛ばなかった。

「よっしやあああ!!」

『芥』という字には、介が含まれており、介と言う字には鑑、隔て
ると言う意味があったハズだ。

俺の能力は字の意味を引つ張り出usrしい。

生まれて初めて、漢字マニアで良かったと思った。

てか目の前の恐竜怖え、超怖え。

「大丈夫か、将真!!」

「さっさと助けやがれ」

腕が攣りそうなんだよ!!

その後、駆けつけた往摩さんと、その愉快的仲間達に助けられた。

三文字目 働かざる物死ねって……

往壓さんの所に住まわせてもらい一カ月。

一週間に一回怪談話に付き合わされたり、働いたり、能力の説明をしたり、ナンパに付き合わされたり、飲み屋に付き合わされたりと色々あつてか、すっかり村には馴染んだ。

相変わらず戻り方は解らないが、結構楽しんでいる。

今は酒屋でナンパに失敗した往壓さんの愚痴に付き合ってる所だ。

「今回はいける気がしたんだがな」

「お前さん、少し女を嘗めていやしませんか？ あんたの作った『妖』って字は、笑うって字に女を足したじだぜ。女はあんたの作り話の妖ぐらい怖いってことだ」

「かつちゃん上手い事言うねえ」

隣で話を聞いていた人に褒められる。中々良い気分だ。

ちなみに、かつちゃんと言うのは俺のあだ名だ、気に入ってはいない。

「往壓さん、今日は、もうそろそろ帰りましょう。明日に響きますよ？ 明日はあの山越えて、お下がりを持戴しに行くんでしょ？」
「そついや、そうだった」

その後も喚く往壓さんを窘めながら、家へと帰った。

「じゃあ、ちゃんと貰ってきておくれよ」
「わーってらあ。んじゃ、行ってくる」
「ああ、行つてらっしゃい」
「あんたも来んだよ」

何故か山を越える羽目になってしまった。
確かに最先端科学に興味はあるが、危険が多すぎる。またあんな目に会つのは御免だ。
だが、能力持つてんだつたら働け、との事らしい。
あの村のモットーは、働かざる物死ねだな。

*

他愛のない会話をしながら、往壓さんと二人で山を登る。
てか、この山高え。
富士山ぐらいあるんじゃないかねえのか？
地に手を付き名を引つ張る。
出てきたのは『不死山』。っておい！！
御伽^{おとぎばなし}がでてきやがった。
しかも一つじゃない。中には本来の『富士山』もあった。
確か、不死山つてのは、かぐや姫が残した不老不死の薬つてのを燃やしたからついた名前だったかな。

「かつちゃん！！ 何やってんだい。早くしねえと日が暮れるぜ」

あんたこそ何やってんだい！！ 登山を始めてする奴に日本で一番高い山登らせやがって！！ と言いそうになるのを抑え、答える。

「この山の名前を確認してただけだ、気にすんな」

そう言って、字を消そうとしたら、不死山と言う字が俺の中に、俺の中に！？ 入って行った。

「不老不死になりましたとか冗談きついで、おい」

試しに手に傷をつけてみるが、治らない。

よし、大丈夫だ。何もなかった、この事は忘れよう。

「早く来い」

「今行くよ」

*

一夜を山で過ごし、（クソ寒かった）現在、下っている所だ。

また、他愛のない会話を交えながら歩いていると、一人の女性と出会った。

「永琳さんじゃあねいかい？」

「知り合いか？」

「おう、今から行く街で、一番賢いお方だ」

赤と青のナース服！？

あ、新しいのか、ふざけている……訳ないか。
あちらもこちらに気付いてやってくる。

おう、中々の美人さんじゃねえか。

「久しぶりだね永琳さん」

「あら往さん、久しぶりですね。そちらの方は？」

「俺のツレで、防人将真ってんだ」

「はじめまして」

互いに手を差し出して握手をし、軽い自己紹介をもらった。

*

「永琳さん、あんな所で何してたんだい？」

「ちよつと薬草をね」

「護衛をつけないなんて珍しいですね」

「つけてるんじゃないかって、勝手に付いてくるだけよ」

で、そのまま下山し、街の入り口まで一直線。

*

今、永琳さんと別れ、街の中に居るんだが、

「ここまでとわな……」

「どうだ？ 村とは比べモンにならないだろ」

車はあるわ、新幹線はあるわよく解らんが、明らかに凄い技術が使われてる事が解った。

ああ、ここにいる俺が場違いに思えてきた。

「かつちゃん、そろそろ行かねえかい？」

「どこにだよ」

「永琳さんの屋敷にだよ」

往壓さんは時々子供その物顔をするよな、てか、あの家に忍び込むとか絶対無理だわ、監視カメラとかめっさあつたもん。

「で、どうやって」

「行き当たりばったり、ってことで」

「行き当たりばったりで、ハイ、刑務所の中とか洒落にもなりませんぜ」

「大丈夫。看守のおっちゃん優しいから」

「捕まったことあんのかよ！？」

んなもん御免だ。捕まったら脱走出来そうにねえもん。

「ま、そう言うなって、俺の能力を忘れたのかい？」

「まさか！？」

「俺の能力は最先端科学だって騙せるぜ。それに」

「それに？」

「運が良けりゃあ着替えシーンだって」

「行こうか、往壓さん」

「それでこそかつちゃんだ」

俺達は、無謀にも天才の家に忍び込んだ。

四文字目 流石は天才さんだわ

「そんなにビクビクせんでええ」

「ほ、本当に大声だしてもバレないんだろっな」

「さっきからそう言ってんじゃねえか。肝が小さいの」

現在、往壓さんとあの永琳さんの屋敷に潜入中である。

監視カメラなどは、往壓さんの『認識を操る程度の能力』のおかげで無事にやり過ごしている。

途中使用人と廊下でバッタリして、心臓が止まるかと思ったが、何も無かったかのように目の前を通り過ぎて行った。

「な、言っただろう？ あっしの能力がありゃバレないって」

「あんた本当に凄いな」

*

「ここだ」

「いよいよ、か」

この奥に居るのは、運が良ければ着替え中の永琳さん。

ダメだ。妙に緊張する。

俺は襖ふすまに手を掛け、思いつき開くと、顔の横を何かが通り過ぎた。中には永琳さん。馬鹿な、気付かれない筈じゃ、

「なん……だと!？」

部屋の中には、扉が開くと作動する、コンピューター関係を何も使っていない仕掛けがたくさんあった。

……流石は天才。俺達が来る事を予想していたらしい。

「往歴さん、今日は失敗だ。大人しく帰ろう」

「ああ、流石は永琳さんだ」

俺たちは、大人しく用意されていたホテルへと向かった。

*

「あゝ、またあの山に登らにやあなんのか」

「ま、そう言いなさんな」

あの山に登らずに進んだら恐竜の餌食。……ん？ 恐竜？

「往歴さん、あんたの能力を使えば、恐竜に気付かれずに進めるんじゃないのか？」

「……」

笑顔のまま固まりやがった。

その後、何でこんな事に早く……、と頂垂れる往歴さんの姿がそこにはあった。

＊

翌日、ホテル出て、お下がりが積み残されている台車を回収し、門を出ようとする、永琳さんに声を掛けられた。

「おはようございます。永琳さん」

「昨日は色々とお楽しみだったわね？」

「全然楽しめませんでしたよ、今度来た時は、ああいうの抜きで普通にお茶しましょう」

「楽しみにしてるわ」

往壓さんとも軽く喋った後、永琳さんは去っていった。

＊

「よし、往壓さん能力を使ってくれ」

「まかせろ！！」

「これで何しようが恐竜にはバレないぜ、ハッハー」

往壓さんと笑いあいながら、無事村へと帰っていった。

*

村へと帰って来てから、数日たった今日。
往壓さんがまた誰か保護してきたらしい。

この時は、この保護された青年の所為で往壓さんと運命が狂うなんて、誰も思わなかった。

五文字目 やり過ぎは良くない

往壓さんが拾ってきた少年、高杉 秀作（たかすぎ しゅうさく）
というらしい。

この危険なご時世に世界を見て回る、と言って結構離れた村から飛び出してきたらしい。

ホント、よくやるよ。能力も無いのに。

今は、往壓さんが怪談話を披露している所だ、飽きないなああの人も。

聞く方も聞く方で、他の話は？ とか言ってるし。

「往壓さん、飯でっせ」

「もう、そんな時間か」。秀さん、食いに行くぜ」

「毎度ありがとうございます」

ふと疑問に思う事一つ。

「秀さん、いつまでこの村に居るんだい？」

「今日の夜に出て行こうと思ってます。食糧もこの村の皆さんが無料で用意してくださったんで」

「なんでい、もう行くんかい……そうだちょっと待ってる」

そう言っただけで自分の家へと帰って猛ダッシュでこちらに向かってくる往壓さん。本当に元気だなあ。

「これもってけ」

「おい、往壓さん良いのかい？ そりやお前さんの一番大事にしてるもんじゃねえのかい？」

家から持ってきたのは、なんと今まで考えてきた怪談話を全て纏めたもの。いつも俺に見せびらかしてたヤツだ。

「こんな大事なものの受け取れません。それに「ええんじゃええんじや。それに、ソレ使って頼まれて欲しい事があんだ」

「なんですか？ 頼まれて欲しい事って」

俺も初耳だ。

「そこに載ってる話をいろんな所で話してほしいんだよ。頼む」

まさかそんな事考えてたとはなあ。

「……解りました。ありがたく貰って行きます。話しも広めます。どこで死ぬか解りませんが、死ぬ時までこの話をいろんな所に広めます」

「ありがとう」

「ようし、じゃあ、今日はアンタの旅立ち祝いだ。しっかり食って、この村でた瞬間食われた、なんてならないようにしてくれよ？」

「はい！..」

そっからは酒は無いが、村の人たちがいろんな野菜を持ってきてくれて本当にもりあがった。

次の日の朝。

秀さんは、村の皆から送り出されて旅立ったとき。

*

秀さんが去ってから三カ月。

いつもと変わらずに起きて、身支度を整え往壓さんに会いに行く。
呼び鈴を鳴らして、出てきた往壓さんの姿を見てぶっ倒れそうになった。

「往壓さん、なんで妖怪なんかになってんだ!？」

「あん、何言ってるんだあんちゃん、寝ぼけてんのかい？」

「鏡見ろ、鏡」

そう言つて、洗面台の前にまで連れて行き、鏡の前に立たせる。

「コレ誰だ？」

「アンタだよ!! 昨日なにがあつたんだい？」

「いや、いつも通り、普通に寝てたら「普通に寝てて妖怪になるか!？」」

本当に何があつたてんだ? この世界じゃ妖怪は往壓さんの怪談話にしか出てこねえ架空の生き物だつてのに。

しかもぬらりひょんって、……妖怪の総大将じゃねえか!!

「なんで妖怪になったんだろうな」

「アンタ、呑気だな。理由を探せ、理由を」
「わあってるよ」

沈黙が流れる。

……ダメだ、なんも思いつかん。

「もしかして」

「なんかわかったのかい!？」

「いや、俺の作った妖怪の設定憶えてるか？」

「雪女は吹雪を生み「それじゃあない」

「じゃあなんだってんだい？」

「妖怪は人を襲って、人の恐れを喰らうって設定だよ。あと、恐れから生まれるって奴」

「それがどうしたってんだ？」

「秀さんが広めまくった所為で、妖怪を作った俺に恐れを抱いて……、って考えりゃ全部あってんじゃない？」

「マジかよ」

秀さん、やり過ぎだ。

あん時、妙にはりきってたもんな。

……って事は、

「って事はお前さん、もしか「キヤアアア」

もしかしたら、別の妖怪も、と続けようとした俺の声を遮って、悲鳴が聞こえてきた。

「往壓さん、この話は後だ。今は、外の奴らを」

「解った。俺は武器を取りに行ってくる。お前さんはいつも通り」
「解ってる」

表へ飛び出し、埃から『芥』と言う字を取り出す。
あの時から、俺の役目は足止め。

武器を取ってくるまで避難の手伝いをする事だ。
頭に過る妖怪と言う可能性を否定しながら、村の入り口まで走る。

「最悪だよ」

襲ってきたのは、恐竜ではなかった。

雷パンツに赤の体。極め付けには金棒。
鬼だ。

六文字目 二度としたくねえわ

取り敢えず、『芥』と言う字を構えて、鬼へと突撃。

相手の注意をこちらに引きつけないねえと始まんねえからな。当然の如く金棒を振るってくる。

こっちも当然の如く防ぐ。

「これまた凄い顔してんじゃねえか、兄ちゃん」

よくこんな顔思いついたよな、往壓さん。アンタのそういう所、本当に感心するよ。

鬼から返事は返ってこない。

（まだ、言葉を覚えてねえみてえだな）

それに、さっきから金棒の攻撃以外、何もしかけて来ない。生まれたばかりで、知識が無いらしい。

おかげで助かったけど。

「かつちゃん、大丈夫か!？」

「往壓さん、後は任せた!!」

鬼から距離をおき、往壓さんに任せる。

そこで俺は、ちょっと疑問に思った。

（今日は、愉快的仲間達と一緒にやねえなあ）

気にしても何にもならんので即刻考えるのをやめた。

あーだ、こーだ考えてる裡に、往壓さんがミサイルを発射。

近くに居た、近所の逃げ遅れたおっちゃんも安堵の表情を浮かべている。

（色々と対策も考え直さねえとな）

恐竜＋妖怪。

中々凶悪な組み合わせだな、こりゃあ。

お、煙が晴れてきた。

鬼の死体でも拌みに行きますか、なんて軽い気持ちで近寄ったらビツクリ。

「なんで生きてんだよ！！」

しばし呆然と立ち尽くす、鬼の周りに居た人たち。

一番最初に動いたのは、鬼だった。

逃げ遅れた女性の恐怖に染まる顔を見て、満足そうに頷きながら喰いやがった。

女の人の悲鳴が迸る。はいつはじ

その声でようやくこの膠着状態から解放された人々は、悲鳴を上げながら逃げる人や腰を抜かして逃げられない人など混乱状態になった。

俺は、これ以上被害を広げない為に、砂を蹴り上げ、砂埃を起こし、もう一度『芥』と言う字を取り出す。

そして、近くで腰を抜かして動けないおっちゃんに手をあてがい、その人に纏わる名が入った門を開き、『父』と言う字を取り出す。

父。

この字は、斧を持って働く男の姿が元になって生まれた字だ。

だったら出てくるのは、斧だ。しかも二つ。

（これ、一本になんねえのか！？）

とか思ったら、一本になった。

ちよつとばかりの融通は利くらしい。

「往壓さん、仲間を呼びに行ってくれ、早く！！」
「ちよつと待つてろ！！」

妖怪になって筋力が上がったのか、一瞬で消えた。

「さて、斧なんて振るつた事も無い俺が、金棒の達人に勝てるのか、勝てないのか」

ま、勝てる訳ねえが、やるだけまだら。

斧を携え鬼に突進。

鬼が馬鹿の一つ憶えの様に金棒を振ってくる。

芥で防ぎ、斧で斬りつけ、左腕を落とす。

「ウアアアアアアアア！！」

「うるせえんだよ！！」

痛みで地面を転がり回る鬼に止めを刺し、その場にヘタリ込む。

眼前にグロテスクな光景が広がっているが、生きるのに必死だった俺は、気にする余裕すらなかった。

「かつちゃん！！」

「遅せえよ、往壓さん……」

俺の意識はそこで途絶えた。

六文字目 二度としたくねえわ（後書き）

かつちゃんが斧を振るえた理由を次回で解き明かす予定。

七文字目 よくもまあこんな事思いついたわ（前書き）

今回の話は、天保異聞を参考にしました。

七文字目 よくもまあこんな事思いついたわ

「う……うう……」

「かつちゃん、大丈夫か？」

と、言ってきたのは、往壓さんではなく近所のおっちゃん。

「あの後、どうなったんだ？」

とにかく情報が欲しかった。

また鬼が攻めてきたとか、違う妖怪や恐竜が来たかも知れない。

「な〜に、あんたのおかげで皆無事だ。……あの人以上はな」

「……そうか。往壓さん、どこに居るか知んねえか？」

「今頃、火炙りにでもされてるかもしれないな」

「ハア！？」

火炙りって……。

なぜ？

全然答え見当たらない。

今回も活躍してくれたじゃないか。

「あの野郎が妖怪なんて物を考えるからいけないんだ」

そうか、そう言う事か。

多分、妖怪が現れた理由を、往壓さんは話したんだろ。

んでもって、村人が襲いかかったって訳か。

アンタらも楽しんでたくせに、都合良い奴らだな〜、ホント。

「どこに居る？」

「ん？」

「どこに居るかって聞いてんだ！！」

気が付けばおっちゃんの胸倉を掴んで、問い詰めていた。

*

「どけ！！」

農具や俺達が取ってきた武器を持って、往壓さんを囲っている輪に、無理やり体をねじ込ませ、往壓さんの盾になるような所に立つ。

「そこをどきやがれ！！」

「テメエら、誰に武器向けてんのか解ってんのか！！」

「解ってるさ。妖怪に向けてんだよ！！」

「妖怪である前に往壓さんだろ？」

「そいつの仲間が俺の女房を殺したんだ。そこを退きやがれ！！」

今回の唯一の被害者の女性の旦那、もとい愉快的仲間達の一員である奴が鎌を持って前に出てきやがった。

当の本人、竜導往壓は呆然として武器を向けられようが、放心状態になってやがる。

「じゃあ、なんであの時、往壓さん以外誰も来なかったんだよ。戦ってない奴が戦った奴を責めんじゃねえ！！」

「でも、コイツは「妖怪にビビッて女房すら守れねえ奴が、うるせえんだよ」……クソ」

ホントにこいつらは、……後先考えずにこんな事やりやがって。

「お前らも考えてみる。往壓さんが死んだら、誰が自警団のリーダーに成るんだ？ 誰がああ街まで武器を取り行くんだ？」

「……」

「オラッ、散りやがれ」

こちらを睨みながら渋々帰って行きやがった。

取り敢えず、放心中の往壓さんの頬を叩く。

「おい、行くぞ」

「……俺は「話しは後で聞いてやる」

鬱壓さんを引っ張って、人気のない所まで移動する。

ちよつと、邪魔されたくねえからな。

さあ、生まれて初めてのショック療法に挑戦だ。運がなければ死一直線。ま、命の恩人だし、俺の命を懸けぐらいには価値があんだろ。

「で、何が言いたいんだい？」

「俺は、大変な事をしちゃった。……妖怪を考えちゃった」

「誰もこんな事になるなんて思ってた筈だ。お前さんの悩む事じゃあない。さあ、妖怪と恐竜の対策について語ろうぜ？」

「違うんだよ……。俺は、自分の作った妖怪を、あんな設定にしちまった所為で、殺されねえといけなくなっちゃった。俺は、自分の息子を殺さねえといけねえ。俺の作った設定の所為で、全部、俺が悪いのに」

「……」

「もう、死にてえよ」

「だったら俺が殺してやる」

ショック療法の始まり始まり。

俺は、服の中に忍ばせておいた包丁を取り出し、切っ先を往壓さんに向ける。

「嫌だ、や、止めてくれかつちゃん、さっきのは冗談だ。頼むから
！！」

俺はそのまま往壓さんに突っ込む。

「俺は死にたくねええええええええええ！！」

多分、往壓さんは俺を蹴って逃げるつもりだったんだろう。
繰り出されたキックは俺の脚に直撃。

普通ならそこで終わる筈だったんだが、今は妖怪。

がむしゃら
我武者羅に差し出された蹴りは、俺の片足をふっ飛ばした。

「遂に言いやがったな」

「お、俺は」

「妖怪の総大将になった所で、お前さんの心は変わんねえ。臆病で
ちんけな竜導往壓だ。だったら、人間らしく、都合のいい時だけや
りたい事、思いたい事を思えば良いんだよ。解ったか？」

今まで無かった痛みが一気に襲いかかってくる。

ま、人生の最後をこんだけ綺麗に飾れれば、悔いは……たくさんあ
るわ。

七文字目 よくもまあこんな事思いついたわ（後書き）

完。

嘘です。まだ、続きます。

……そろそろ原作キャラを絡ませねえと。

八文字目 名を操る程度の能力（前書き）

お気に入り登録件数 11件

やる気がでたのに文才は変わらない……orz。

八文字目 名を操る程度の能力

「かつちゃん、かつちゃん!!」

「ん、んん!?　なんで生きてんだ?」

千切れた足がくっ付いてやがる。

だが、服が破けてねえから夢じゃねえよな。

「往壓さん、俺に何したんだい?」

「いや、それがお前さんの体に怪我をしてないって認識させたら、新しい足が生えてきてさあ。妖力って知ってるか?」

「お前さんが作った、妖怪だけが持つ力だろ?」

「ああ、そうなんだが、その妖力のおかげで「現実を歪めれるようになった」とそういう事だと思うんだが」

ま、生きてんならどうでもいいや。
で、

「俺のショック療法は効いたかい?」

「効きすぎて壊れる寸前だったよ」

「そりゃあ良かった」

どうやら一回死んだのも無駄じゃ無かったらしい。よかったよかった。

他の皆も一日経てば、ちよつとは冷静になんだろ。

「うし、帰って寝るか?」

「ああ、今日は疲れた。色々あり過ぎて」

「お、こいつを渡してなかったな、色々あって忘れてたよ」

と、言つて差し出してきたのはメモ帳とペン？

「ん？　これがどうしたつてんだい？」

「おいおい、あんた、自分の能力忘れた訳じゃねえだろ？」

「あー！！　なるほどな」

メモ帳に字を書けば、どんな字だつて取り出せるつて事か。
往壓さんから受け取つて、試しに『父』という字を書いて、手を翳^{かざ}す。

ん？　なんも起きねえな。

『紙』と『書』と『隅』は取り出せんのに。

「どうした？」

「なんか、ダメっぽい」

「……もしかして、字じゃなくて、名じゃねえのかい？」

名を操る程度の能力。

確かに、それなら納得できんな、うん。

「そうみてえだ。ま、今までと変わんねえからいんじゃないかね？」

「あんたの能力だ。あんたの好きにすりゃあいい」

名前ねえ……、だつたらこれも名前だよな？

自分の門を開き、『将』という字を取り出す。

将。

この字は、薙刀を振るう姿を現した字だよな？
だつたら出て来んのは、

「体からそんな物だして平気なのかい？」

「おう、俺の字だからな」

俺の手には薙刀が握られていた。

何故か知んねえが、体さつきよりも軽い。何故だ？

試しに薙刀を手放してみる。

……やっぱりな。

どうやら、武器が補正してくれてたらしい。

だから、鬼の時も、こうしたい、って思ったら出来たのか。

「どうしたんだ？ 持ったり下ろしたり」

「この武器を持ったら、ちよつとだけ強くなれるってのが解ったんだよ。さ、帰って寝よう寝よう」

*

翌朝。

村の集会が行われた。

言うまでもなく、昨日の件についての対策だ。

正直、俺は何も思いつかねえけど、三人寄れば文殊の知恵とも言っし、なんか案はでるだろ。

そうこう考えてる内に集会所。

往壓さんの周りには、昨日の事を謝るやつ、避けるやつ、感謝を述べるやつとまあ、いろんなやつらが集まってた。

ま、ちよつとは考えたって事か。

「では、集会を始めたいと思います」

村長の秘書？　のような人の掛け声で集会が始まった。
色々な意見が飛び交う。

途中からは罵声まで加わつとる。お前らは小学生か。
そこで往壓さんが動いた。

「静かにしろ！！」

流石は妖怪。尋常じゃない声のおおきさが鳴り響く。

ああ、耳がいてえ。

「俺の考えを聞いてくれ。多分こん中で一番いい意見だと思う」

自分で言うか。

「皆は俺の能力知ってんだろ？　その能力でこの村を隠そうと思うんだ」

「それは大分前にやって失敗しただろ？　力が足りないとか何とか言って」

「あの時の俺は人間だった。でも、今じゃ皆の知ってる通り、妖怪だ。前より力もある」

「本当に出来るのか？」

「ああ、昨日実際にやってみて解った。全然余裕ってことがよ」

結局、これよりいい意見はです、往壓さんの案が採用される事になった。

で、その後の話しあい、念のためにあの街へ武器を取りに行く事になった。

*

現在、俺は地面に向かって盛大にリバーズしていた。

「かつちゃん、もしかて乗り物苦手か？」

「あんだ、早すウエエエエエ」

「うわ、こつち向いて吐くんじゃねえ！！」

俺と往壓さんが武器を取りに行く事になり、人力車を持って村から出た数分の所で、かつちゃんが荷台に乗って、妖怪の俺が押せば早いんじゃない？ という意見を実行した所、この有様だ。
ま、落ちなかっただけマシだろ。

「よし、行きますか」

「ああ、さつさとすまして帰ろう」

街の門を叩き、門番を呼ぶ。

やっぱり妖怪対策だろうか、人は出て来ない。

暫くすると声が聞こえてきた。

「あんたの名は？」

「竜導往壓と防人将真だ。半年ぐれえ前に武器を取りに来たから、リストに名がある筈だ」

「今、確認する。少し待っている」

そして名前が見つかったのだろうか？ 門が開き、俺達は通された。

八文字目 名を操る程度の能力（後書き）

次回こそは永琳を……。

九文字目 そりゃ驚くわ（前書き）

まず初めに謝らなければならぬ事があります。

八文字目で出てきた『将』という文字ですが、おもいつきり成り立ちが間違っていました。

本当にすみません。

ですが、将は薙刀、という形で物語を考えている為、修正も出来ません。

本当に申し訳ありませんでした。

以後、このような事が起こらないようにしていきますので、今後とも、『東方漢神録』をよろしく願います。

九文字目 そりゃ驚くわ

中に通された俺達は、いつも武器を積んでくれるおっさんの所に行
ったんだが、

「あん、武器を渡せない？」

「悪い。俺達もあの化物が怖いんだ」

そりゃあそうだろ。俺だつて怖えし。
しゃあない、もう一つの方に行きますか。

「永琳さんの所を覗きに行くか？」

「着替えじゃねえだろうな？」

「まさか」

*

相変わらずデケエ家だなあ。

インターホンを押す俺に威圧感が襲いかかってくるぐらいだ。

「はい？」

「防人と竜導です」

「久しぶりね。ちょっと待っていて」

待つ事数分。

永琳さんが、自分から迎えに来てくれた。

往壓さんの姿を見て驚いているが、当然だろ。半年前とは雰囲気とか、姿が全くもって違うからな。

「少し見ない間に随分変ったわね、往さん」

「いや、色々あったもんで」

流石は天才。

その一言で何かを察したのか、興味がなかったのか、何も聞かずに中へ招いてくれた。

さて、話を始めますか。

「永琳さん、実は俺達の所にも妖怪が来ていてな、被害に困ってるんだ。これが村の地図なんだが、なんかアドバイスをくれないかい？」
「そうね、まずはここに丸太を……」

やっぱり天才。

一目見ただけの地図に的確な助言をくれる。

*

「いや、助かった。本当にありがとな」

「別にいいわ、これぐらいの事なら」

おお、俺なんかより頼もしい。

「んでもう一個頼みなんだが「悪いけど、武器はあげられないわね」……そうか」

流石は天才。

俺なんざの言葉はすぐに想像できるらしいな。

八意永琳恐るべし。

ん？ 八意？

八？

……思いだした！！

「永琳さん、一つだけだ、一つだけでいいからこれでもかって程の性能の奴をくれないかい？ いや、見せてくれるだけでいい」

「見せるぐらいなら別にいいわよ。着いてきて」

つて、家の中にあんのかよ！？

様々なパスワードを入力し、五つぐらいの分厚い壁のようなドアを開けていく。よくパスワード憶えれたな。

ていうか、核とか出てきそうなんだが。

「これよ」

そこにはジャンル別に最強と書かれた武器が置かれていた。

ショットガンとかもあったが、村人が撃つんだ。もうちょっと扱い易い物を選ぼう。

「かつちゃん、見してもらったってどうにもなんねえぞ」

「ま、往壓さんも武器を選べって」

往壓さんが手に持って来たのは、いつも通りのミサイルランチャー。

うし、やるか。

「永琳さん、アンタの名前を借りるぞ」

「え!？」

もちろん驚く。

自分の前にいきなり門が現れて、それに手を突っ込まれたら、誰だ
ってこうなるだろ。

今回引きだす文字は『八』。

八。

この字には、無限という意味が含まれている。
八百万の神とか言うだろ？

ま、とにかくたくさんって意味だ。

それを、往壓さんの持つて来たやつに植え付けてと。
みるみる内に増えていく。

どれくらい増やすかはコチラで操作できるから、これまた安心だ。

「あなた、私に何をしたの？」

「そんな怖い顔しないでくれ、ちゃんと説明するから」

少年？説明中……

「先に言ってくれば良かったのに。というよりも、もっと増やし

てほしいのだけれど……」

「幾らでも増やせるぜい」

「そう。それは良かったは」

ようし村に帰りますか、と意気込んでいたその時。
この街の自警団？ が走ってきた。

「そんなに慌ててどうしたの？」

「周り、周りを妖怪に囲まれました!!」

「!!?!?」

息を切らしながら紡がれた言葉に恐怖を感じた。

十文字目 またかい！！（前）

「はあ」

「おいおい、溜め息ついたって何にも変わんねえぜ」

「って言われてもな」

妖怪に周りを囲まれたという報告を聞いて、永琳さんは作戦を考えるに、俺たちは、当然作戦を考える訳でもねえんで走ってシエルターへ急いだ結果。

妖怪に周りを囲まれた。

どうやってあの嚴重な門くぐって来たんだよ！？

あゝ、今度から遺書持ち歩こうかな。

残す相手がいねえけど。

愚痴ってもしようがねえんで将を取り出す。

「なあ、俺にも武器くれよ」

「解ったからそんな目で見んなって」

『往』と言つ字を取り出す。

往。

中国の王を表す文字だ。王の権限は全てを裁ける事。それが誰であ
ろうと。

そして裁く時に使うのが、^{まさかり}鉞だ。

「使ってもいいんかい？」

「アンタの名だ。どうぞお好きなように」

鉞を手渡した瞬間、

「おお、なんか体が軽いぜ！！」

どうやら武器補正は誰にでも効くようだ。

おい、妖怪の力でそんなに振り回すな、馬鹿野郎！！

「おお、わりいわいい」

さて、戦いますか。

すぐ傍まで来ていた鬼に薙刀を突き刺す……前に妖怪が崩れ落ちた。
はあ？

周りを見渡せば次々と上半身と下半身がお別れしている。

んで、気付けば隣に、鉞担いだ金太郎ではなく往壓さん。

「いや、妖怪つてのはすげえな」

「あんたが産んだんだろ？ んで、これはあんたがやったんかい？」
「ああ」

おいおい。

武器補正えげつねえ。

これからは渡す奴に気を付けねえと。

「往壓さん、あんたここで妖怪退治手伝ってやれよ。俺は、永琳さんに会いに行ってくる」

「わあった。そっちは任せたぞ！！」

「任せんしゃい!!」

*

で、別れたんは良いんだが、

「俺ここの土地あんま知らねえじゃん」

道に迷った。

最初は解ってたんだが、妖怪避けながら歩く内、見知らぬ場所へ…

よし、人に聞けば解るだろ。

走る事数分。

妖怪と戦闘中の人発見。

おお、固定型のレーザー銃。破壊力は抜群のようだが、レーザーが細すぎる。

んでもって、妖怪の数が多すぎる。

ああ、あれが拡散したらな。

……。

方法発見。

「おいその人」

「こつち来てはいけません。早く離れてください。ここも長くは持ちません」

おお、自警団の鏡のような人だ。

「ちょっと失礼」

手のひらから『掌』（たなごころ）という字を取り出す。

『掌』の『尚』は『向』^{まど}と『八印（発散する）』から成り、窓から空気が広がる様を表す。

「オラ、広がれ!!」

掌を植え付けた瞬間、前方180度隅々まで隈なく光が包む。

「おお、やりすぎた」

用法容量はキチンと守りましょう。

十一文字目 またかい!! (後) (前書き)

ps3が壊れた……orz。

十一文字目 またかい！！（後）

「あゝ、やっちた」

「やっちた。じゃないですよ。何やってんですか!？」

「妖怪退治」

ま、正直、俺もやりすぎたとは思っている。

が、今はそれどころじゃない。

道を訊かねえとな。

「なあ、永琳さんどこにいるか知らねえか？」

「唐突ですね」

「急いでんだよ」

「行つてどうするんですか？」

「色々と相談を」

「あなたみたいな部外者を連れていく事はできません」

知り合いなだけだな。

それより、

「周り妖怪だらけだけど、どうする？」

「どうするもこうするも、あの銃は、あなたの所為で使いモンならないじゃないですか!！」

さっきの銃は、掌を植え付けた瞬間、耐えきれずに爆発しました。はい。

「所で、あんちゃんの名は？」

「……神火（アビ）だよ」

「これまた珍しい名前してんなあ」

ま、そのお陰で助かったけどな。

神火の胸に手をあてがい、門を開く。

「あんたの名を借りるぞ!!」

神火。

こいつは、山の民の言葉で火山を表す。そして、この文字の象徴は『炎』。

神火から取り出した名を使い、周りの妖怪どもを炎で焼いていく。
まだ学習していないらしい。

自分からこちらへ突っ込んでくれる。

「俺の体に何をした!?!」

「言ったる? 名を借りただけだ」

頼むからその銃を下ろしてくれ。

俺、人間だから。

マジで怖いって。

「ほら、さっき助けてやつあああああああ!!」

「どうした!!」

「足、攣った」

「……」

んな物騒なもん向けられたら、誰だってこつなるだろ?
お、銃を下ろしてくれた。

「なんか気が抜けた」

「じゃあ、永琳さんのば「却下」……」

は、どうすりやいいんだ？

道は解らん、目の前の奴には疑われてる。打つ手がありやしねええ。

「かつちゃん、こんな所で何やってんだ？」

「道に迷ちまってねえ」

鉞担いだ往壓さんの登場。

総大将、何とかしてくだせえ。

「妖怪なら全部俺が殺したぜ」

「はあ？」

「いや、この武器持ったらスパッと出来るようになってな。永琳さんから貰ったこの無線機で指示出してもらって、スパッとしたり全滅したらしい」

チートだ。目の前にチートがいる。

ていうか、永琳さんに会ったらしいな。

俺は小声で往壓さんに話しかける。

「……あんたの尋常でねえ動きはどうやって説明した？」

「能力の応用ってことで」

「解った」

*

で、街の復興やらを、往壓さんの力で街に襲撃を受けていないと認識させ、全部直しやがった。

本当に敵わんわ。

……こっちの味方で良かった。

現在、永琳さん、往壓さんとで軽い打ち上げ中。

他愛のねえ会話とかして、それなりに楽しんでいる。
そこで、唐突に話が変わった。

「私たち、月に移住するの」

「ツキ？ ここいらの地名には詳しくねえんだが」

「そうじゃなくてあれよ」

そう言つて指差したのは、夜空の向こうで密かに輝く月。

「……酒がまわるに早くないかい？」

「永琳さん、そんな冗談通じやせんぜ」

「冗談じゃないわ。私達は、穢れに弱い」

穢れ？

なんだそれは？

「説明しにくいから省くわ。妖怪と人間が色んな所で争っている所
為で、最近、穢れが酷いのよ」

「あゝ、なんとなく解った。で、月に移住すると」

「よくわかんねえが、月に行くって話だろ？」
「そうよ」

そこで往壓さん身を乗り出して重要な事を問いかける。

「ここにある武器とか技術、持っていていいか？」
「私達が去った後なら幾らでもどうぞ」
「ヨッシャアアア！」

往壓さんが発狂したかと思えばまた落ち着いた。
忙しい人なこった。

「もう、永琳さんにあえねえのか……。よし、今日とことん飲もう。永琳さん、ほらコップ」

「ええ、ありがとう」
「行く日を教えてくれや、せめて見送りぐらいしたいんで」
「まだまだ先の話よ。ざっと一年ってところかしら」

なぐんだ、まだまだじゃねえか。
月一ぐらいで来れば解りやすいだろ。

「月一ぐらいで来るから、後一年、よろしく願います」
「こちらこそ」

十一文字目 またかい！！（後）（後書き）

神火という名を、天保異聞の登場キャラから借りてきました。

十二文字目 はぁ……

「おいおい、そりゃあどういうこつたい？」

「どうもこうも、月に移住する前に、妖怪に一矢報いるつもりなのよ」

妖怪が街を襲ってから半年。早いもんだ。

毎月一回は必ず往壓さんと来て進み具合を確認している。

……来る度に永琳さんが色んな装置のことを説明してくれるが、何言つてのか全く解らん。

「残る者としては、とんだハタ迷惑な話だ」

「そんな事にはさせないから安心して」

「最高権力者言うんだから大丈夫だろ？」

こないだの襲撃で研究施設の一部を壊され、さぞお怒りな学者さんがいるらしい。

で、そいつが月行く時に核以上の破壊を持った爆弾を落とそうとかほざいているらしい。

往壓さんが能力で直したんだから水に流せばいいモンを。

「そついやさ。秀さん、どうなつてんだろな？」

「さぁ？」

……未だに話を広めてそうで怖い。

「秀さん？」

「あゝ、全国を旅して周る家出少年ってどこか」

「墓参りぐらいしてやりてえなあ」

「おいおい、勝手に殺してやんなよ」

*

更に半年。

正直、報告するような事は何にもねえ。

一つ言つとすれば、永琳さんのおかげで、学者さんの提案は無視されたらしい。

ありがたやありがたや。

「いやゝ、一年、早かったなゝ」

「俺もそう思うわ」

俺も、何だかんだ言つて、もう向こうに帰る方法探してねえし。

「取り敢えず、永琳さんに挨拶行つとくか」

「でもさ、忙しそうだったぜ？」

「じゃ、酒でも飲みますか」

「うし、賛成」

永琳さん、にやあ悪いが先に「先に飲むなんて酷いわね」

……なんだこのタイミング。

天才は空気まで読めるのか！？

「まあまあ、そこに座んなさいって」

「私の家何だけど」

「気にしちゃ負けだ」

三人で集まんのも今日で最後かな。
なぐんかやれるもんじゃないかな。

……何にもねえや。

「ま、どんどん飲みなさいって。明日はもう会えねえから、今の裡になんかやろうぜ。こう、……お別れ会的な」

「あんた何歳だよ？」

「じゃあ他に何かあるか？」

「……」

「うし決まり。文句ねえだろ？」

*

「「ウエエエエエエ！！」」

二人して盛大にリバース。

あゝ、頭がイテエ。

「酒に弱いわね」

「アンタ強すぎだろ！！」

妖怪の往歴さんに勝つなんてどんな胃袋してやがんだ。

ちなみに昨日お別れ会でやったのは野球拳。

結果は俺達が全裸。永琳さんが脱いだのは帽子だけ。

二人して挑んだのに負けた……。

で、どうしも服の内側が見たくなつた俺達は酒での対決を提案したんだ。

勿論、負けた方が全裸つてお約束付きだ。

俺もこの時ばかりは勝利を確信した。

だが、結果は酷かった。

「あゝ、月に行つても元気でな」

「以外と呆気ないお別れね」

「昨日が強烈過ぎただけだ」

「ま、元気で」

二日酔いの所為で、非常に、本当に素っ気ない別れになつちまつた。で、あいつらの去つたこの街を漁つて、使えそうなモン積んで歸つてる途中何だが。

「おゝ、飛んどる飛んどる」

空をロケットが埋め尽くす。

本当にあの量をよく作つたモンだ。

さてさて帰りますか。

「なあ、かつちゃん」

「なんだ？」

「黒い玉みてえのが落ちてくんだが」

「あゝ、本当だな」

「……」

永琳さん、あの案否決にしたんじゃねえのかよ。
ほんと、置き土産ならもうちょっとマシなのを選んでほしい。」

「往壓さん、落ちそうな所まで連れてつてくれ」

「なんか策はあんのか？」

「何にもしないよりマシだろ？」

「そりゃそうだ」

往壓さんの背中に薙刀を持って乗っかる。

武器補正のおかげで、ちよつとはGを受け流す事が出来んだ。

背中に乗った瞬間、意識が飛びそうになるのを無理やり堪える。

「着いたぜ」

「早！！」

吐き出しそうになるのをこれまた堪える。

自分の体に門を開き、両手を突っ込む。

oh...中々グロテスクな光景だ。

「人を防るなんて大層な字面で飾ってんだったら、本当に救って見
せろ！！」

俺の姓は防人。

人を防ると書く。

字ではなく、名を操る程度の能力だから出来た事だ。

おゝ、俺の名が爆弾を包んでくよ。

で、そのまま地面に落ちてきて、

ポスン。

スポンジのような可愛らしい音をたてた。

「あんたチートだな」

「お前さんに言われたかねえよ」

あゝ、死ぬかと思った。
よかったよかった。

「さて、村に帰りますか」
「おうよ」

*

「なんで……だよ？」

そこには瓦礫しかなかった。

いや、瓦礫のある方がマシなぐらいだ。

ただの更地になっていた。

俺達は気付けなかった。

爆弾が一発じゃない事に。

十二文字目 はあ……（後書き）

ご意見、感想お気軽にどうぞ。

十三文字目 そんな事言っから(前書き)

遅くなって申し訳ありません。

十三文字目 そんな事言うから

あれからどれくらいぼーっとしたかすらわからねえ……。もの凄く時間が経ったと思う。空いた口から出たのは、

「墓作ろうか」

だった。

それから無言で俺の能力を使った場所まで戻って、大きな石を運んでくる。

で、俺が往歴さんに鉋渡して石を削り、形にしていく。

「こんなもんか？」

「こんなもんだろ？」

時間が大分経ったおかげで、少しは整理がついた。さて、これからどうしよか？

「取り敢えず、復讐する」

「だな」

よし、決定。

ん？ なんか不穏な単語が聞こえたって？
何も不穏なこたあない。

復讐したいって思うのは当然だろ？
どうやって月行くな？

「くそ、あんなに綺麗な所にいきやがって」

「本当に綺麗な満月だ」

……月に行く前に飢え死にしそうだ。

ヤバイ。冗談抜きで。

コイツは死活問題だ。

「かつちゃん、俺の認識を操る程度の能力で一秒を百年ぐらいに認識させてやるよ。誰もいない所なんてつまらないだろ？」

「そいつは良い案だ」

千年もすれば生き物かなんかも復活するだろ。

でも、その間に死なないか？

「大丈夫だ。体は数秒としか認識してねえからな」

うわ、チートだ。規格外すぎる。

「じゃ、早速」それを止めて頂きたい「……生き残りか？」

俺達の目の前には鬼がいた。

だが、雰囲気が違う。

それに言葉を話している。

「私は神だ」

「……往歴さん、あんな妖怪いたか？」

「産んだ覚えはねえな」

イタイ妖怪とか始めて見たわ。

「これは妖怪の体を借りているだけだ。こんな穢れている場所まで

降りるんだ、生身で降りる気も起こらない」

「……で、神様が俺達に何用で？」

「竜導往壓。貴様が妖怪を作った張本人だな？」

「ああ、あつてるぜい」

「これから妖怪を私達、神の鎧とする。異論は認めない。それを言いに来ただけだ。後は好きにしろ」

神の鎧？ 何言つてんだ？

訳が解らん。

「おいおい、もうちょっと説明つてもんをだな」

そついうと、帰ろうとしていた足を止めた。

ちゃんと説明してくれるらしい。

「ここは穢れている」

いきなり侮辱されたよ、おい。

「我ら神が生身で降りてきても問題は無いのだが、こんな穢れている所に降りる気はせん。だから妖怪という体を借りる。それだけの話だ」

はあ……、そんな事、往壓さんの居る前で言ったら、

「ちょっと待て」

ほくらキレちゃったよ。

「もう言う事は何も「こつちにはあるんだな」それが」

そのまま神様とやらを蹴り倒し、（勿論、妖怪の力で）浮き上がった体を無理矢理地面に押しつけ、跨り、押さえつける。

「あいつ等は俺の子供なんだ。親の前でそういう発言は良くねえよなあ？」

「貴様、何をする！？」

神さんの問いかけを無視して、そのまま自分の意見を語る往壓さん。

「認めないつつてんだよ。俺の息子を鎧なんて物にさせてたまるか」

「貴様こそ、妖怪を何匹も殺したくせに！！」

「そこは『人間』らしく割り切つてんだ」

おお、俺のショック療法が効いてたらしい。

俺も足吹っ飛ばされたかいがあつたつてもんだ。

「私を殺せば、この妖怪も死ぬぞ？ それでもいいのか？」

「かつちゃん、武器出してくれ」

俺は素直に指示に従い、往壓の往から鉞を取り出す。だつて、今逆らつた殺されそうだもん。

「はいよ」

「だからこの妖怪も死ぬと」俺の能力は、認識を操る程度の能力つていつてな、ま、その名の通り、認識を操れる訳だ」

みるみる内に神様の顔が恐怖で染め上がる。

「その体に傷を認識させないで、お前さんの精神にだけ認識させる

事も出来んだ」

そう言いながら、どんどん鉞の切っ先を胴体に近付けていく往壓さん。
とんでもなくえげつない。

「や、やめてくれ。あ、ああうわあああああああああああああああああああああああ
あああああ!!」

俺の眼には、不思議な光景が映っていた。

確かに鉞が刺さっているのに、血の一滴も出ない肌。
そんな肌の様子とは裏腹に、絶叫をあげる神様。

「胸でこんなに痛いんだ。次あたり、眼でもいつとくか？」

軽い調子で尋ねる往壓さんに、必死の命乞いをする神様。
そして遂に言った。

「よ、妖怪を鎧にしないから!!」

「それでいいんだよ、それで。はあ、最初に言っていたらこんな事になんかったのに」

往壓さんが立ち上がると、神様は一目散に逃げていき、まあ、あの扉的ななんか開いて消えっただ。

(あの扉の奥の風景、どこかで……)

赤を基調とした、どんな絵具を使っても再現出来そうにない綺麗な赤。

……思い出せねえからいいや。

十三文字目 そんな事言っから（後書き）

次回は、漢字のまとめ表？ 的な物を作ろうかと思っています。

一章で使用された漢字一覧（前書き）

一章を読んだ後にお読みください。

軽いネタバレを含みます。

一章で使用された漢字一覧

芥

この文字の『介』には、隔てる、鎧などの意味があります。
この意味を取り出す事によって、盾と使用する事が出来ます。
衝撃なら全て防ぐ事が出来ませんが、概念的な物は防げません。
例・幽々子の蝶など。

不死山

富士山から取り出した名で、山の名前を確認しようとした防人の体に勝手入っていった。

この文字のおかげで、防人は不老である。不死ではない。

父

この文字は、斧を持って働く男の姿から出来た字で、この成り立ちから斧を二つだした。

願えば一つになるなど、多少の融通は利く。

将

この文字は薙刀を持つ姿を現した字ではありません！！
作者が意味を間違えました。本当に申し訳ありません。
本当の意味はそのうち登場させる予定。

八

日本では、無限という意味を持っているとされている字。
この意味から物を増やす事が出来る。

往

中国では王の意味を持つとされている。

王の権限は誰であろうと裁く事が出来て、裁く時に用いられたのが
鉞。

この意味から鉞を取り出した。

ちなみに、『王』の一番下の『一』は、鉞の刃の部分を表している。

掌

『掌』に含まれる『尚』という字は、『尙』（窓という意味）と『
八印』（発散する）から成り立っていて、窓から空気が広がる様を
表している。

この文字の意味を、極細の一直線しか攻撃できないレーザーに植え
付け、百八十度、隈なく広がる武器にへと変貌させた。

神火

『あび』と読みます。

この名前は、山の民の言葉で火山を示していて、文字の象徴は『炎』

です。

この意味から、炎を操る事が出来ます。

防人

この物語の主人公の性。

人を防^{まも}ると書き、その意味から人々を傷つける物を無力化する事が出来る。

あくまで人を防るので、自分の身を守る為に使うと効果が薄れる。
他人を守る時に、ついでに主人公を守ってくれる。

一章で使用された漢字一覧（後書き）

まだ九文字しか使っていないなんて……。

以外と少ないですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2125w/>

東方漢神録

2011年10月9日21時39分発行